九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

語意考の成立過程を示す二三の傳本について

笹月, 清美

https://doi.org/10.15017/2556627

出版情報：文學研究. 26, pp.57-84, 1939-12-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

語意考の成立過程を示す二三の傳本について

笹月清美

一

語意考の成立過程を明らかにすることは、たゞに眞淵の學問生活の眞相を究める上に必要であるばかりでなく、五十音圖によつて動詞の活用を說明する學說が、眞淵と士清とのどちらに先に成立したか、乃至は、その相互の間に影響關係があつたかどうかといふ國語研究史上の一問題(一)に關聯してゐる。しかるに、その成立過程は、まだ明らかになつてゐない。井上豐氏は『語意考について』といふ論文(二)で、眞淵の他の著作中の記事から推定して、寶曆七年前後に稿を起し寶曆十年末までに一應稿が成つたのであらうとし、「明和六年二月に最後の稿をゝへ、これを置土産として同年十月に世をさつた」と記し、かつ、眞淵・士清の兩說は「もと〳〵獨立になりたつたものとかんがへる」と述べてをられる。この推定は恐らく正しいであらうと思ふのであるが、この小稿では、語意考の未定稿を寫した二三の傳本を紹介して、この問題の解決に資し、併せて、語意考の板本に錯簡のあることなどを記してみようと思ふ。

註一　保科孝一氏の「國語學小史」(明治三十二年八月大日本圖書株式會社刊)以下、最近に到るまでの國語學史を參照。

二　井上豐氏「語意考について」（國語と國文學　昭和十三年五月號）

二

語意考が板行されたのは、寛政元年夏である。この板本は、その錯簡を別とすれば、眞淵が明和六年二月に記した稿本に、忠實に從つてゐる。而して、明和六年二月の稿本が、眞淵としては、最後の、完成した稿本であつたことは、その自跋からして、推測出來る。いま、これを、定稿と呼ぶことにすれば、管見によると、語意考の諸本は、この定稿を中心として、次の五類に分たれる。

第一類　未定稿の一
　音無文庫（九州帝國大學圖書館藏）本
第二類　未定稿の二
　廣瀨文庫（九州帝國大學圖書館藏）本
　東京文理大本(一)
　無窮會神習文庫本(二)
　龜田次郎氏本
第三類　定稿

岩瀬文庫本(三)

宗像神社文庫本

（川喜田久太夫氏本）

（竹柏園本）

第四類　板本

第五類　狛諸成增補本

無窮會神習文庫本(四)

無窮會神習文庫本(五)

靜嘉堂文庫本

以下、右の諸本を解說し、各類の特徵とそれら相互の關係について記すことにする。

第一類　未定稿の一

第一類の本は、その奥に、

寶曆十一年八月加茂眞淵記

とあるもので、これに屬する本としては、管見の限りでは、音無文庫本があるだけである。以下、音無文庫本につい

て第一類の特徴を述べよう。

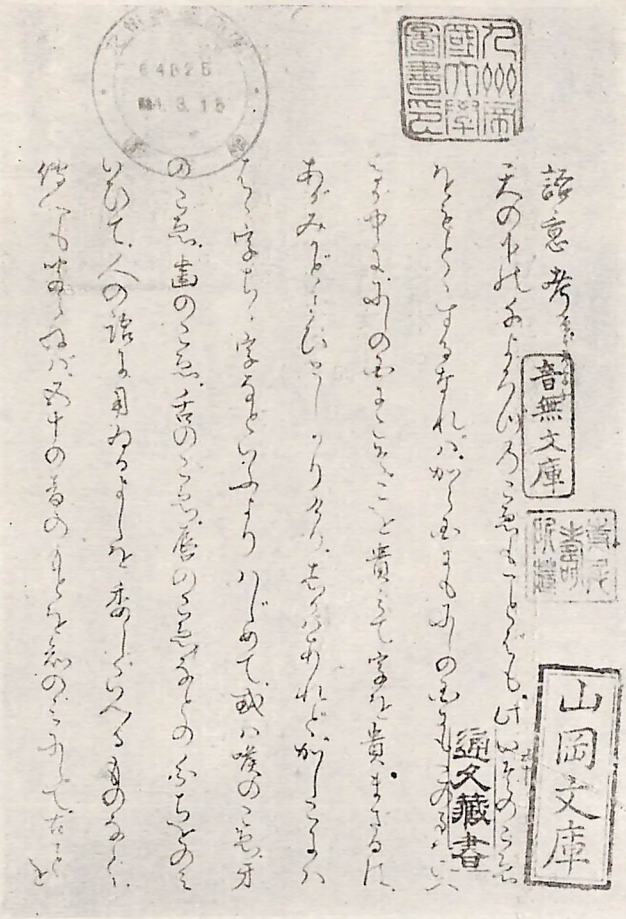
音無文庫本　寫本一册

音無文庫本は、山岡浚明の自筆本で、初葉に、「山岡文庫」及び「通久藏書」の長方形の印があり、卷末に、

此書山岡俊明自筆可
愛玩　岩文政酉極月
田口朋良　方印

とある。墨附十九葉、半葉八行、行二十三四字である。標題は、題簽には、語意考とあり、内題にも語意考とあるが、内題では、考の字を、同筆の朱で、「原本考字無」と訂してある。

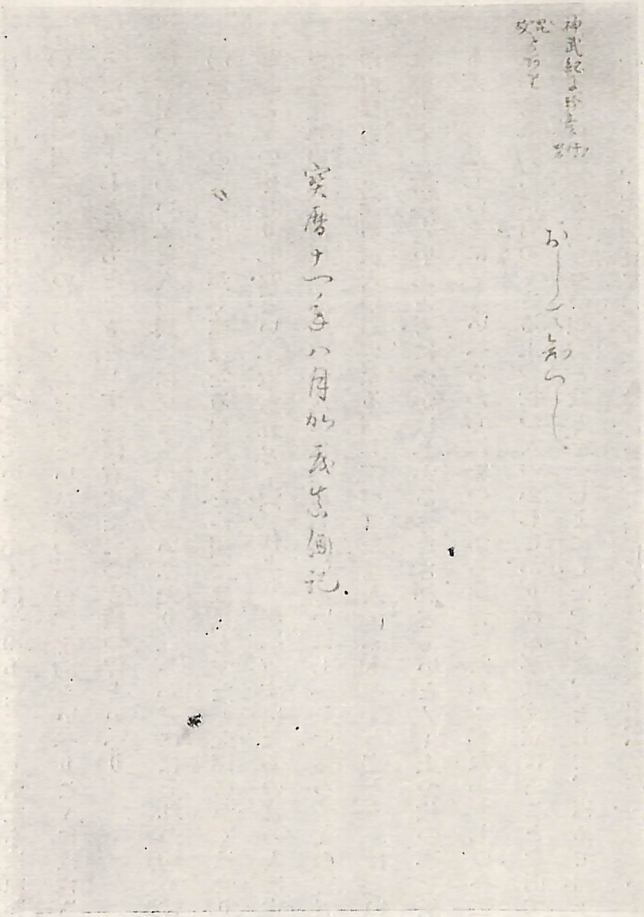
この本の著しい特徴は、初めの總論に當る部



音無文庫本　初葉

分が定稿と全く異なつてゐることで、その全文は次の通りである。

天の下の千よろづのこゑもことばも此いそのこゑをもとゝするなれはから國にもにしの國にもこの事をいへるが中ににしの國にこそこを貴みて字を貴まざるはあがみかどにひとしかりけりしかはあれどかしこにはゝ字ちゝ字などいふよりはしめて或は喉のこゑ牙のこゑ齒のこゑのこゑ舌のこゑ唇のこゑなどの分ちをのみいひて人の語に用ゐるよしを委しくいへるものなく傳へも聞えねは五十の音のもとを知のみにして古ことを解によしなしかれ荷田東方呂ぬし此みかとの古ことをとくにつけてとし月におもひ得たることも多しされと猶ことのたら



音無文庫本　末葉

（三一一五）

ひたるにしあらねばおのれはたつぎていさゝかくはへぬることあり猶たらはぬをはのちの人加へ給へ

○ひとの國には此竪の五つの言を音といひ横の十の言を韵といへりこゝにはさる音韵をあへて貴とますたゞにことばの故よしと分ちとをもとゝすれば右はたての言（コトバ）横の言といへり

○言（コト）をつゞめいふを人の國には反とも切ともいひたり此みかどにはそれの約（ツヅ）め言（コト）それの延言（ノベゴト）といふ

○此五十のことばをかく連ねたる形はひとの國には見えずたゞ此國にかくはせりといへりかれならの宮なる吉備のおとゝの作れりしなどいふ事あれど上つ代より考へ下すにならの宮の人は古ことを傳へたるのみにてさるべき人なし猶近江清原藤原の宮の人にさへあらしいといにしへこそもろ〳〵の言五十音にかなひて委しく正しく聞ゆればあかりたる世人のわざなるべしすべて是は人てふものゝわざともおほえぬまであやしく妙になんあるからは神のなし給ふといふともにつかはしかるへきされどもいと〳〵上つ代の事を思ふに只天地にかなへる世にて言も天地のなしのまに〳〵いへるからはおのつから此音にたかふ事なかりしのみ也しかれば人の世と成てかしこき人のせし物には有めりさる上つ世の人のかしこかりけん事は文意に古ことを引ていふをむかへて知べし

これを定稿に比べると、その總論と跋とを一しよにしたやうな、そして、極めて簡單なものである。

これに次いで、定稿（以下、便宜上、板本に從ふ）と同じく音圖が來るが、たゞ「五十言」とのみあり、圖中板本と異なるものを擧げると、

阿以宇恵袁　獨立本言、
加畿久氣古　清濁二言、

多知都氐登　同
奈爾奴禰乃　清言
波比布閇保　清濁二言
麻美牟迷毛　清言
也伊由延與　同
良利流例呂　同

などである。

次ぎに来べき、板本の十一・十二兩丁の部分(阿行和行のことから、言の始めを濁る事なしの項に至る)は、この本ではここになく、後の方になつてゐる。

こゝには、その次の初言・體言・用言・令言・助言についての説明がある。板本(十三オ—十六オ)よりも、内容は簡單である。

次ぎに、板本(十六オ)に、「初言體言用言令言助言を二言にいふ類」とあるのが、「初言體用令助の言のわかちの事」といふ題になつて出てゐる。それに續く説明もほゞ同じである。

次ぎに、板本(十八ウ)に、「同九行を各三言にいへる類」と題して出してある表が、「右の五言を各三ことばづゝにいふ類」と題して出してある。而して、板本で、

加行　さやかん　さやぎ　さやぐ　さやげ　さやこ
　　さやきなん　さやがふ　さやがふ　さやがね　さやかも
　　さやがひ　さやがす　さやがせ
　　さやがし　さやかゆ　さやかめ
　　さやかへ

のやうになつてゐるのが、この本では、

加行　サヤガン　サヤギ　サヤグ　サヤゲ　サヤゴ
　　＞キナノ約　＞ガリノ約　＞ガルノ約　＞ガネノ約　＞カモノ約
　　ガヒノー　ガユノー　ガヒノー
　　ガフノー　ガメノー
　　ガシ　ガスノー　ガヘノー

といふやうになつてゐる。これによつて見ると、板本に横に語が並べてあるのは、初めの行の、「さやがん・さやぎ・さやぐ・さやげ・さやご」が、夫々その左に並んでゐる語の約であることを示してゐるのであつて、所々に見える～の符號が、そのしるしなのである。なほ、板本加行第二段の「さやがふ」は「さやがり」の誤刻であることが、この本によつてわかる。この本の「サヤゲ」の項の「ガヒノー」は「ガセノー」の誤りであらう。

次ぎに、前にあげた、板本の十一・十二兩丁の部分がこゝに出てゐる。但し、簡單である。

次ぎに、板本（二十ウ）では、「延言約言」といふ條であるが、それが「約言延言の事　延言は下にいふ」として出てゐて、

その初めに、板本にない圖表、その一部を示すと

加　キアノ反　キサノ反　　幾　カイノ反　クイ反　　久　キウ反　ケウ反　　計　クエ反　コヱ反　　古　ケヲ反　ケソ反

といふやうな五十音の假名の反切の表がある。これは板本に、

後世にはから國に反といふに依てかへしといへどわか國には二言を約めて一言とし一言を延て二言にいふことあれはかへしとのみいひてはたらはさる也

と記してある部分に相當するもので、このやうな考へから後の稿ではこれをとり除いたのであらう。第二類の本にも既に見えない。

右に續いて、約言の例として、淡海國・遠江國・行知布などが來ること、大體板本と同じく、その簡略な形である。この次ぎに、板本では延言が來るのであるが(板本はこゝに錯簡がある)、この本では板本(二十五ウ)の略言の部に相當するものが來て、次いで延言となる。板本にある「轉回通」は、この本では標目として立てられてゐない。又、略言の所の十二月の名の釋義もこの本にはない。

かくして、最後に、板本(二十九ウ)に「清濁を通はしいふ例」となつてゐるものが、「清濁の言の事」と題されて、バ行・ガ行・ダ行・ザ行の順序で簡單に記してあり、それで全卷が終つてゐる。板本は、バ行・ザ行・ダ行・ガ行の順序になつてをり、かつ、この本にない事項が、三十一丁裏の第七行以下大尾の三十三丁裏までに記されてゐるのである。

この本は、以上のやうな本文の末に「寶暦十一年八月加茂眞淵記」の識語を有するのであるが、更に、その裏（十九ウ）に、

源をグェン　貴をクヒの類一條とすへし

エ廻通　夕佐禮婆　爾奈の約は奈なるを奈を佐に轉せり萬葉五に春奈禮波といひ又春佐利久禮婆ともよめれは也

その他一項の記載がある。これは次に述べる岩瀬文庫本に伴直方が記してゐるやうに、山岡浚明の案であらう。

さて、この音無文庫本、すなはち、山岡浚明自筆本を、曾つて伴直方が見たことが、岩瀬文庫本によつて知られる。岩瀬文庫本は第三類の本であるが、伴直方の自筆本で、音無文庫本との比校が朱で書入れてあり、本文の終りの「右明和六年二月再考　加茂眞淵」の次ぎに、朱で、

イ本　寶暦十一年八月加茂眞淵記　天保六年八月廿三日山岡明阿の自筆の本もてかうかへ卒りぬ

とあるのである。そして、前に記した音無文庫本の冒頭の二葉（總論の部）が巻初に寫し加へられてあり、約言延言の所の假名の反切の表が、それに相當する場所に附箋で貼付されてあり、又音無文庫本の巻末の追加については、

直方云此一條は山岡明阿が加へたるものなるへし

と記してある。すなはち、岩瀬文庫本は、音無文庫本の閲歴を示してゐるのである。

以上によつて明らかなやうに、音無文庫本は、内容の構成やその立場などは定稿と同じで、ただ、非常に簡單である。眞淵が、寶暦十年十月にしるした萬葉集大考の中に、「古き言は五十音をよくしらでは解べきよしなし仍ておのれ語意ちふ物しるして別にあり」といつた『語意』は、ほゞこの音無文庫本と同様のものではなかつたであらうか。但

し、寶暦七年六月に成つた冠辭考の附言に、既に、

語を解には專ら五十音をいふ、そが中にたてよこの通ひ、反りなどは本よりにて、ことおこすこゑ、ことをわる韻、こと過る韻、おほする韻、うこく韻、うごかぬこゑ、のぶることば、つゞむることば、めぐりて通ふ語、ふたゝび通はせる語、正しく濁る語、すむと濁ると通ふ語、ながば濁る語、なと様の許多の例をもていへり、猶盡しがたき物は語意考にいひてこゝに略けり

とあり、又、寶暦初年と推定される書簡(六)に同様の言葉が見えるのからすれば、語意考の初めて制作されたのは、もつと前の筈であり、從つて音無文庫本を第一次の稿本であるとすることは、躊躇しなければならない。しかし、少くとも、極めて初期の形を示してゐることは、確かであらう。

註一　東京文理科大學には、「語意考」と「眞淵語意考」との二寫本が藏せられてゐる。その内後者は板本からの寫しで、刊記まで寫してあり、歌意考及び文意考と合綴されてゐる。こゝにいふのは勿論前者である。

二　無窮會神習文庫の分類番號七・丁四・一二〇四六の本。

三　岩瀬文庫本は影寫本による。

四　無窮會神習文庫の分類番號七・丁四・一二〇四七の本。

五　無窮會神習文庫の分類番號七・丁四・一二〇五〇の本。

六　縣居書簡（賀茂眞淵全集　卷十二）　四四四頁。

三

第二類　未定稿の二

第二類の本は、内題に「語意」とあり、巻末の識語がたゞ「加茂眞淵考」となつてゐる本である。明和六年二月の眞淵の自跋はまだない。

總論は、第一類のと異なり、四ケ條にわけて說かれたもので、語句の異同を別とすれば、定稿のと全く同じてゐる。但し、語句の異同は相當多數にのぼる。たとへば、「ひとつ」の條の末が、

ことばの國のもとをしめしたるは貴からずや妙ならずや

となつてゐるが如きである。以下、板本と比較して、異同を示さう。

總論の次ぎに來るのは五十音圖であるが、板本には「五十聯」とあるのが、第二類では、「五十聯音」とあり、圖中の相異は、

安以宇延遠　獨立本音
末美武免毛　清

などであり、圖末の初・體・用・令・助を、「はじめの音」・「うごかぬ音」といふやうに記してゐる。

これに續く說明（板本十ウ）は、兩者同じである。但し、語句は甚しく相異する。

次ぎに、「〇阿伊宇延袁は同行と和行とは云々」といふ所（板本十一ォ）から、「陀爾てふ辭は多陀爾の略なれどもこは

言の下にのみつきて上にいはねは嫌ひなし」(板本十三ォ半)までは、第二類では、この場所になくて、全巻の最末にある。いま、その部分の語句の異同の中、主なるものをあげると、第二類には「〇毛伊はもゆもよと動き云々」(板本十一ウ—十二ォ)の一條が全然存しない。又、最後に次の様な一條がある。すなはち、

〇阿行は專ら獨立音にて次の八行にも通はさるを和行にのみ通ふは和行は本阿行の轉音なれば也かく袁の音のみ他へも通ひ助辭にも多く用ると和行の末の於は言の上にのみいふ音なるをはての下に在とを對へ見れば袁於の二つを相對へて始終の末におきたるなりけり是によしあしあるへし猶おもひてん

とあつて、最後に、

加茂眞淵考

とあるのである(七十二頁の寫眞參照)。

さて、第二類の本は、右の部分を後廻しにして、板本でいふと「〇横韻の事右に初體用令助の五つを分ちしるせしことわり」(板本十三ォ)の部が來る。但し、第二類の本にはこの標題はなく、直ちに、「加左多奈波麻也良和云々」となつてゐる。この部分は、以下、大同小異である。

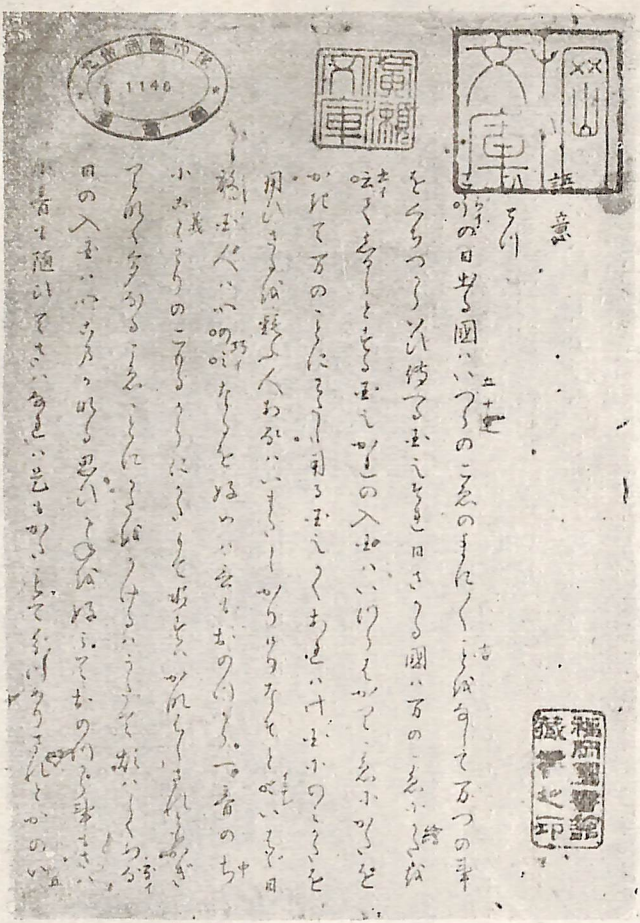
次ぎに、板本と同様に「〇初言體言用言令言助言を二言にいふ類」(板本十三ォ—十八ウ)及び「〇同九行を各三言にいへる類」(板本十八ウ—二十ウ)の二部分が來る。語句の異同は多いが、中で後の部分中の「〇こゝの令の音につかねと言は云々」(板本二十ォ)の一條は、第二類の本にはない。

次ぎに、「延言約言」(板本二十ウ)が來るが、第二類の本では、第一類同樣「約言延言」となつてゐる。而して、

こゝにつゝめことのへことゝいふ也から國に反といふによりて後世にはかへしといへど此國は延言もありて反のみならねばつゝめのへと對へていへり其事をいさゝかいはゞ

とあつて、「淡海國云々」に入る。これに續く部分は大體同じであるが、板本に比すると、第二類の本は、「竪の音を云々」（板本廿二ォ）と「並の横韻を云々」（板本廿二ウ）とが逆になつてゐる。而して、「竪の音を云々」の條の次ぎに

○萬葉卷廿にわれをみおくるとたゝ理之といふはたちたりし也其たちの約はたなればたゝりしといへり是らの類は限りなく多かれと皆此さまにてめてたかふ事な



廣瀬文庫本　初葉

し

の一條がある。これは板本にはないのである。この下、板本廿三ウに割註になつてゐる「かく約め通はせる本を云々」の一條は、第二類の本にはない。廿四ウの割註「かくその言の本を云々」も同様である。

次ぎは、「延言」(板本廿四ウ)の條であるが、板本はこゝに錯簡がある。その錯簡を正すと、次ぎに來るものは「轉回通」で、その次ぎが「略言」である。然るに第二類の本には、この「轉回通」(第二類では「めくらし通はす言」となつてゐる。)と「略言」との間に、

○二回轉三回轉も有

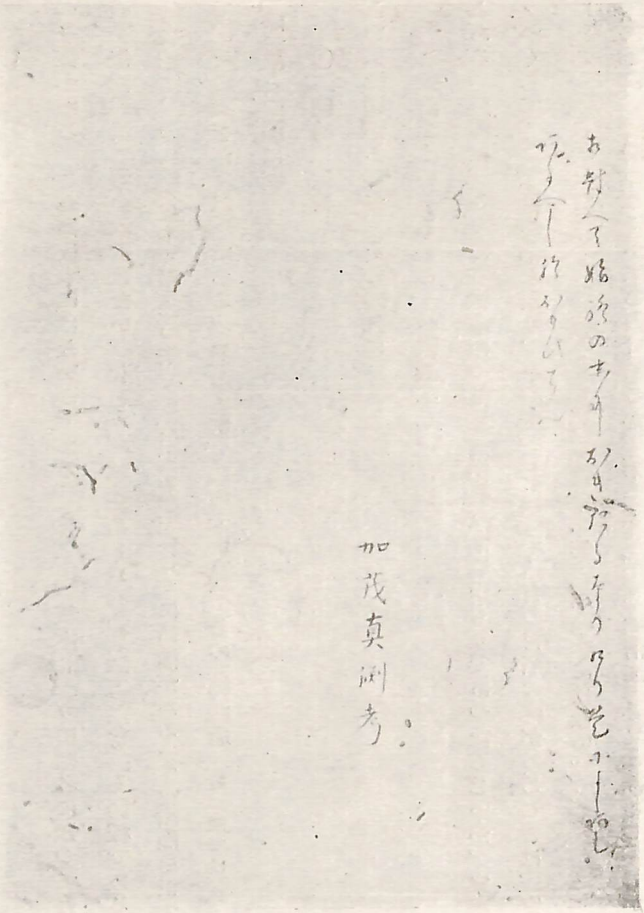
といふ標題があつて、その頭註に、

こは萬葉にいへるをこゝへ書入へし

とある。眞淵は、こゝに右標題のやうな一條を設けるつもりであつたらしいが、定稿本には全然見えない。かくして、「略言」の部となり、その例として、十二月の月名の釋があることは、定稿本に等しい。但し、その次ぎにある「乎々里と云は云々」(板本廿九オ)の一條は、第二類の本にはない。

次ぎに、清濁のことが來るのであるが、第二類の本では「清濁の言」と標題し、しかも、順序は、ガ行・ザ行・バ行・ダ行の順であり、かつ、板本の最後の所、「清濁の言は古事記日本紀の外云々」(板本三十一ウ)以下、巻末までの部分が存しない。而して、こゝに、初めの方の、「阿伊宇延袁は同行と和行とは云々」(板本十一オ以下)があつて、「加茂眞淵考」といふ識語になつてゐることは、既に述べた所である。

以上が、定稿（便宜上、板本に従った。）と比較した第二類の本の性質である。定稿と順序の相異する箇所が二つあり、定稿にない標題（但し標題だけ）が一つあるけれども、他は、全く同内容である。たゞ、語句はかなり相異してをり、概していへば、定稿より簡單である。この第二類の本が何年の稿であるかは、これに屬するどの本にも「加茂眞淵考」とあるのみで、日附がなく、詳らかでない。しかし恐らく定稿のすぐ前の段階の稿本であらうと考へられる。井上豐氏が前掲論文の中で、眞淵が明和五年に宣長に與へた書簡(一)に、



廣瀬文庫本　末葉

語意の事可書草稿一冊有之、今度遣候、御覽候へ、是はいまだ不定にて大意をもいまだ不記候まゝな

がら先づ遣候。御覽の上は心付之事は助言可被成候

とあるのを擧げて、「總論はあとからつけくはへられたのであらうか」といはれたが、この明和五年の書簡に述べられた『語意』は、右にいふ第二類の本に當るのではあるまいか。もし、さうであるならば、總論は既についてをり（總論は第一類の本にもついてゐる）、書簡に「大意」といつてゐるのは、定稿本に見える自跋のことであらう。

以下、第二類に屬する本について記す。

廣瀬文庫本　寫本一册

表紙の裏に、「本居宣長先生ノ自筆ナラント云說モアルヨシ」と記した紙が貼つてあるが、もとより當らない。初葉に、「桐文庫」・「福岡圖書館藏書之印」・「廣瀬文庫」等の朱印がある。本文は十八枚で、異本による校合が朱書してある。

東京文理大本　寫本一册

表紙に

加茂眞淵　甕守［花押］

語意考　全

と記されてゐる。内題には、もちろん、「語意」とある。本文、三十二枚。「加茂眞淵考」といふ識語の次ぎに、

これの一卷は德巖寺なる覺品大とこのもてりしをこひえて寫しぬ元本いと假字の誤り多くてこゝかしこ違へりとおもはるゝふしもあれは猶よき本をえて校合すへき歟かくいふは文政十三年己丑のみな月赤櫟園の主鈴木甕守

と記されてゐる。

無窮會神習文庫本　寫本一册

表紙に

荷田東麻呂

語意　加茂眞淵考

とある。初葉に、「井上賴圀藏」の印の外に、「岸本氏」・「大塚重冠藏書之印」の朱印がある。卷末に「加茂眞淵考」と記されてゐることは、いふまでもないが、更にその後に附加へて、眞淵の明和六年の自跋が、「語意跋」と題して揭げられてゐる。なほ、この本には、原本以外の頭註がある。

他(ヤ)魚足云（二箇所）

今城云（九箇所。この中に「他(ヤ)氏か考」・「佗氏考」などがある。）

愿正云（朱にて一箇所）

などがそれで、何れも寫本の校正に關する事項である。

龜田次郎氏本　寫本一册

初葉に「大阪府圖書章」・「寧樂文庫」の朱印がある。本文二十一枚。

魚足云　（二箇所）

今城云（五箇所。この中に「池(マヽ)氏考」とあり）

などの頭註がある。この點、前の無窮會神習文庫本と似てゐる。

註一　縣居書簡續編　七〇（賀茂眞淵全集　卷十二　五二四頁）

四

第三類　定　稿

定稿を第三類とする。これの成つたのは、明和六年二月である。内容は全く板本と同じい。もちろん、板本にある錯簡はない。これに屬する本としては、

岩瀬文庫本　寫本一册

初葉に「岩瀬文庫」・「杉園藏」、第三葉に「伴氏家印」の朱印がある。本文の末に、

右明和六年二月再考　加茂眞淵

とある。眞淵の例の自跋はこゝにはまだ存しない。次ぎに、

右以義文藏書書寫畢　文化七午年九月　伴直方　此書本居宣長の序ありて寛政元年刊行せり

と記してある。すなはち、これは伴直方の寫本なのである。かくして、次ぎに紙を更めて、

語意跋　直方いふ　この跋は翁の家集に出せるをもてこゝにかいつけぬ

として、例の自跋を載せてゐる。これによると、元この本には、跋はついてゐなかつたものとみえる。次ぎに、又、

紙を改めて、「語意附言」といふ狛諸成の文（これについては、第五類の條で述べる。）を記し、その末に、

こは諸成がみつから書て草稿のまゝなれは文字のたがひなとさはにありてよみえがたきところ〳〵多かりされとそのまゝ寫しおきぬいとまあらはかうかへたゝさんものぞ　文化十二亥とし文月九日　伴直方

とある。この外、この本には、第一類の山岡浚明自筆本の初めの二葉が巻初に添へられてあり、かつ、その本との比校が朱書してあつて、

天保六年八月廿三日山岡明阿自筆の本もてかうかへ卒りぬ

といふ識語がある。そのことは、前にも記した。けだし、伴直方が、語意考の定稿本を寫して、それに語意考諸本の面影を書き輯めておいたものであらう。この本を板本と照合してみると、内容は全く同じであるが、たゞ五十音圖のア行が「阿伊宇惠袁」となつてゐるのと、文章の中に漢文化された部分のあるのとが違ふ。後者は、たとへば、巻末の一條が、

○此記には多くは古書の出る所を不擧者煩ケレハ也不レ擧者亦皆有レ據ナリ見人思、又依レ處而擧而亦一二のみ擧て止畢然者其故山緣限レ之と勿レ思

となつてゐるが如きである。これがどういふ事情に本づくかは詳らかでない。なほ、この本には、板本にある頭註は全然存しない。

宗像神社文庫本　寫本一册

青柳種麿の自筆の寫本で、題簽には、單に「語意」とあり、初葉に、「柳園」・「青柳氏庫書」の方印がある。眞淵の明

和六年二月の跋があり、その後に、

寛政の元のとし文月末つかた　青柳彌彦

と記されてゐる。板本のやうな錯簡のない所から見ると、定稿本からの轉寫と思はれる。青柳種麿は寛政元年江戸に出てをり、秋から冬にかけて、霞ケ關の藩邸で、狛諸成(後出)から借りて、眞淵の著書をいろいろ寫してゐる。それらは、宗像神社文庫に現存してをり、この『語意』もその中の一つである。多分、諸成所持の定稿本から寫したのであらう。日附によると、後に述べる、諸成の增補よりは前である。この本には、板本にある頭註はすべて存してゐる。岩瀬文庫本のやうな、文章の漢文化はない。因みに、彌彦といふのは、種麿の一時の名であらうか。

〔附〕

川喜田久太夫氏本　寫本一册

竹柏園本　寫本一册

この兩本は實物を拜見しないので確かなことはわからない。しかし、前者は、岡田希雄氏の『古言梯版種攷』といふ論文の附記に、(一)

伊勢の川喜田久太夫氏の秘藏せられる眞淵自筆の「語意」につき照會したところ、「明和六年二月再考賀茂眞淵考」(再考の二字黑線にて抹消す)とありて、音圖は刊本と變りなき由云々

とあるのから推察すれば、定稿本であると考へられる。又、後者は、『竹柏園藏書志』に、

奥に、明和六年二月の眞淵の文詞と、安永二年長月の狛諸成が眞淵との交を書ける跋とあり。

と記されてゐる點、及び、同書所載の寫眞に見える本文から考へて、この類に屬するものと推測される。

第四類　板　本

語意考は、眞淵の歿後、寛政元年に、宣長の序を附けて板行された。板本には、

一、寛政元年酉夏　東武西村源六　皇京西林平八

二、寛政元年酉夏　皇都書林菱屋孫兵衞　勝村治右衞門

三、寛政元年酉夏　皇都書林菱屋孫兵衞　林伊兵衞

四、弘化三年丙午夏　菱屋孫兵衞

などの諸版がある。その內、西村・西林版が最初のらしい。(二)宣長の序には、

年ごろうつしまきにて傳はれりけるをみさとの書あき人西むらの何かしいかの家にこひえて此ごろ板にゑりてすりまきになしたる云々

とあるが、東武である筈の西村を「みさとの書あき人」といつたのはどういふわけであらうか。二・三・四は、弘化三年のは勿論、寛政元年とあるものも、後の板行である。但し、全然同じ板を用ゐた再刷である。

さて、この流布板本には、錯簡がある。板本をつぶさに讀むと、次の三箇所は、文章が續かない。

一、板本卅四ウ、延言の條の三行目、「延ていふになるを由都以波牟良と唱るは伊保の」の、延ていふにとなるをとの間。

二、板本廿五ウ、略言の條の五行目と六行目との間。何となれば、五行目までは略言で六行目は延言であるから。

三、板本廿六ウの最後の行と廿七オの最初の行との間。すなはち、「紀萬葉らに五百箇磐石と書るはいほついはむらてふ言通ふ事もなくたゞに略けり」の、いはむらとてふ言との間。

しかるに、賀茂眞淵全集・國語學大系(三)なども、板本に從つて、これらをこのまゝ續くものとして載せてゐる。

いま、板本を定稿本たる岩瀬文庫本に比べてみると、岩瀬文庫本では（宗像神社文庫本も同樣）右の一の條（板本廿四ウ）が、

延ていふにて延言約言は事ノ表裏而已也

とあつて、それから二の條の六行目（板本廿五ウ）の「見るすくなきのるを延て云々」へ續いてゐる。それから、三の條の板本廿六ウの最後の行まで行つて、そこで、一の條のなるをへ歸るのである。すなはち、

「板本廿六ウ」紀萬葉らに五百箇磐石と書るはいほついはむらなるを「板本廿四ウ」山都以波牟良と唱るは

と續く。かくして、廿五ウの

家を倍上を倍道を知石をしてふ類はたゝにはふけるなり

まで行つて、それから、廿七オの最初の行、

てふ言通ふ事もなくたゞに略けり

に續くのであるが、こゝに重複がある。右に傍線で示した部分は不要なのである。岩瀬文庫本によると、（宗像神社

文庫本も同様)、

家を倍上を倍道を知石をしてふ類は引クニ(ダニ)響通フ事もなく直略セリ

となつてゐる。(宗像神社文庫本には「たゝに略けり」とある。)

要するに、板本では、廿五丁ウ八行目から廿六丁ウ八行目までの部分が、廿四丁ウ三行目の延ていふにとなるをとの間に入るべきなので、而してその前後に多少の誤脫を生じてゐるのである。板本は、以上のやうに順序を變へて始めてよく通ずる。恐らく、その板行に際して錯亂を生じたのであらう。

〔附〕

無窮會神習文庫本　寫本一册(四)

井上賴圀博士の舊藏本である。終りに、みちのくの人中臣種芳の門人、源秀芳が、師から借りて寫す旨の奥書があり、末に、

あまつ御かみのひともゝあまりはたとせにあたるみとしの天津ひつきしらしめせしゆむとしの冬十二月はしめつかたはたあらためかきつましらえの梅園にすめる　源秀芳誌

とある。しかし、內容は板本と全く同じく、錯簡も同様であるから、板本からの寫しであらう。

註一　立命館文學　四卷八號(昭和十二年八月)

二　國語學大系第一卷の語意考の解題には菱屋孫兵衞・林伊兵衞が開板したやうに記してあるが、宣長の序文から考へて、西村・西林版を最初とすべきではなからうか。

三　賀茂眞淵全集　巻十　三五三頁の十八行、三五四頁の九行、同頁の十八行。
國語學大系　第一巻　十九頁の八行、二十頁の二行、同頁の十一行。
四　無窮會神習文庫分類番號七・丁四・一二〇四八の本。

五

第五類　狛諸成增補本

これは狛諸成(野田帶刀)が、萬葉考における場合と同様に、眞淵の語意考を未完成なりとして、本文に所々筆を加へ、その旨ならびに私案などを頭註にした本である。初めに、「語意ついで」と題する橘千蔭の序がある。それによつてこの增補本のいはれを知ることが出來る。全文は次の通りである。

あが加ものうしのいへらく、かみつ代の一言はしもつよの百千にわかれり下つよの百千をとかんには。上つ代の一言をなも明らめよと。うべなるかも其一言はやがて言靈のさきはひませる一言にして。かしこしともかしこきはみ也けり。うしさきにことばのこゝろとふゝみかきおけれと猶またからすなもあるを。狛少兄は。うしに名づきおくれるたくひにあらで若苗のわかゝりし時ゆ。開花のみさかりなるころ。かしこきみまへにして。日にけにうしとあけつろひ。とひあきらめたるがへに。菅の根のねもころにつとめ。あさちはらつばらかにかゞなへて。望月のまたけくみちたらはせるなせり。いでや其一言は言たまのさちにして。少兄のこをまたくせしは。あかうしのさちならすや。おのれ千蔭おちなかれとうしの門つ人のつらなれは。此ふみのはしに其ことわりついて

よとなも。少兒のきこせるまに〳〵しるせるのみ　田道婆名能遲可解

その次ぎに「附言」と題する狛諸成の文があり、

寛政はしめのとし霜月　狛少兒諸成がいふ

と記してある。次ぎに、「許刀婆能古々呂といひかふるよしをいふ」と題する諸成の文がある。それによると、

言意（コトノコヽロ）ちふ書をおのれあらはしぬよて語意（コトノコヽロ）といひしをこたび改て古刀婆能古々呂となしつるをこゝにことわりぬ

とある。頭註にも「猶委は言意にいふ」と記した所があるから、諸成に『言意』といふ著のあつたことを知る。本文は、定稿本がもとになつてゐる。板本によつたものでないことは、錯簡のない事によつて知られる。眞淵の明和六年二月の跋はついてゐる。

諸成は、「阿伊宇衣於」を排し、眞淵の説に從ふと稱して、「阿伊宇惠袁」とした。これは、既に記したやうに、第一類の本及び定稿本に見る所である。以下、この類に屬する本をあげよう。

無窮會神習文庫本　寫本一册

この本には、「許刀婆能古々呂といひかふるよしをいふ」といふ狛諸成の文がない。「井上賴圀藏」の朱印があり、「かきつかへ給ふ御問にこたふ」及び「賀茂眞淵が墓のさまをいふふみ」の二文と合綴してある。

無窮會神習文庫本　寫本二册

第一册には「語意考附錄」、第二册には「語意考」とあるが、一つに續くものを便宜途中で切つて、二册にしたのである。同じく井上博士舊藏本であるが、前のに比べると、狛諸成の文もあり、頭註など少し多い。

靜嘉堂文庫本　寫本一册

松井博士舊藏本である。後につけたらしい表紙には「語意考」とあるが、元表紙には、「古登婆能許々呂　天地」とある。一册に合綴したもので、第十七丁オの所に、「語意二の卷」と記してある。

以上、語意考の成立過程を示す二三の傳本について記した。これを要するに、第一類の本は、寶暦十一年八月に成つた稿本で、寶暦七年六月の冠辭考の附言に既に語意考の名が見える所からすれば、これを以つて直ちに第一次の稿本とすることは差控へなければならないが、しかし、それに極めて近い形を示してゐると見ることは許されるであらう。何れにしても、士清の日本書紀通證が板行された寶暦十二年より前の寫本であることは注目に價する。而してその内容は、論の構成も立場も、ほゞ後の定稿と同じで、たゞ敍述のしかたが著しく異なつてゐるだけである。次ぎに、第二類の本は、單に「加茂眞淵考」とのみあつて、惜しいことに制作の年時が明らかでない。しかし、定稿に非常に近く、二三の點を除けば、兩者の相異は、語句の違ひだけになつてゐる。この場合も、これを、第二次の稿本と見てよいかどうかは詳らかでないが、定稿のすぐ前の稿本であることは、確かである。これについで、明和六年二月の定稿が出來、かくして語意考は成立したのである。寬政元年夏の板行及び同年冬の諸成による增補などは、むしろ、成立後の小發展に過ぎない。

さて、以上述べた事實を以つてしても、士清の說との先後問題に、必ずしも明確なる斷案を下すことは出來ない。又、語意考の成立過程そのものを細かに確定することも出來ない。しかし、なほ、從來の研究の上に更にいくらかの

光を投じ得たとすれば幸である。

（三一三八）

（昭和十四年十月稿）